



練習中は、技術面だけでなく精神面において大切なことも繰り返し伝えた



2013年のWBC(ワールド・ベースボール・クラシック)で、黒木さんはブラジル代表のバッティングコーチを務めた

PLAYERS

国際協力の担い手たち

日本体育大学

世界に貢献できる人材を

スポーツを愛する学生たちが集まる、日本体育大学。大学が擁する豊富な人材や知見は、開発途上国におけるスポーツの普及・振興の面からも期待されている。スポーツを通じて、大学国際化の最前線を取材した。



野球が人生を変えた

体育・スポーツの総合大学として、多くのアスリートや体育教員、スポーツ科学者らを輩出してきた日本体育大学に、おとし8月、「国際交流センター」が新設された。目的は、大学が掲げる基本方針の一つである「国際化」を踏まえて、交換留学やJICAボランティアの派遣などを推進し、グローバル社会で活躍できる人材を育成することだ。

「留学や国際協力に関心を持つ学生



バッティングの指導を行う黒木さん(左)。子どもたちとの信頼関係を築くために、個人ノックを頻繁に行ったという

次の芽を育てるために

まず照準を合わせたのは、コーチ着任から5カ月後の全国大会。黒木さんは技術的な指導に加えて、練習は手を抜かない、道具は丁寧に扱う、グラウンドを整備するといった礼儀や態度の面も指導したが、1カ月が過ぎたころある壁に直面する。グローブを投げたからグラウンド1周など、黒木さんが決めたルールに子どもたちが耐えられなくなり、13人のメンバーのうち3人しか練習に来なくなったのだ。それでも、自分の信念を曲げなかった黒木さんの根底にあったものは、やはり野球だった。「高校時代に自分が目指す打球フォームが正しいのか悩んでいたとき、父親の『三振でもいいから

は、年々増えています」。こう話すのは、同センター職員の黒木豪さんだ。今は、学生の背中を後押しする黒木さんだが、実は自身も日系社会青年ボランティアに参加して、ブラジル・サンパウロで野球を指導した経験を持つ。

今をさかのぼること7年前。日本体育大学を卒業後、体育教員を志していた黒木さんは、当時、非常勤講師を務めていた横浜市の中学校で、生徒との関わり方について悩んでいた。「生徒の思いもよらない発言や行動にどう対応すべきか分からなくなったとき、先輩教員からのアドバイスはいつも目から鱗が落ちる内容でした。自分も今までの価値観をひっくり返すような経験を積み、教員としての幅を広げなければ」と強く感じるようになったのです。経験を積める場として、そして6歳から続けてきた野球を生かせる場として、ブラジルへの派遣は絶好の機会だった。

200万人近くの日系人が暮らす同国では、さまざまな日系人コミュニティの中で、黒木さんが派遣された町のチームには70人ほどが所属していた。「私は13〜14歳の子どものコーチを任せましたが、練習中は失敗してもみんなヘラヘラと笑っていて、試合ではコールド負けが当たり前。それを見たとき、厳しい練習を乗り越え、結果が出たときの喜びを分かち合うという、野球の本当の楽しさを伝えようと心に決めたのです」と黒木さんは振り返る。



JICAボランティア事業の連携に関する覚書を交わす、日本体育大学の谷釜了正学長(右)とJICA青年海外協力隊事務局長の小川登志夫局長(左)

お前の野球をやれ」という言葉に支えられました。自分が信じたことは曲げない。隊員時代の私にとってそれは、野球の本当の楽しさを知ってもらったことでした。そして、その思いは伝わった。練習に参加し続けていたメンバーが見る見る実力を付けていく様子を見て、他の子どもたちも戻ってきたのだ。

迎えた全国大会。約30チームが出場する中、黒木さんのチームは以前と見違えるようなプレーを見せ、初の決勝リーグ進出を決めた。その後の準々決勝で、優勝候補のチームに敗れてしまったが、子どもたちは最後まで諦めずに戦い抜いた。「今までは負けても全く気にしていなかった子どもたちが、試合の後、みんな悔しそうに泣いていたのです。指導する立場の私の方が、忘れてかっていた野球の素晴らしさを改めて学んだ気がしました」と黒木さんは話す。

現在は、国際交流センターを訪れる学生の相談に乗っている黒木さん。学生にとっては、実際の経験に基づいたアドバイスが受けられるため、心強い存在だ。「実際に現地に行くことで、自分の無力さにも気付かされますが、その中で何ができるのかを必死に探し出す経験は学生を大きく成長させます」と黒木さんは話す。学生が特に心配する現地での生活や、帰国後の進路についても、親身に相談にのっている。おとし8月には、JICAとの間



JICA短期ボランティアとしてブラジルに派遣された学生たち

でボランティア事業に関する連携の覚書を結んだ日本体育大学。途上国におけるスポーツの普及・振興へのより一層の貢献と、学生の人材育成を目指している。2013年度からの3年間で、49人の卒業生がJICAボランティアとして世界に羽ばたいている他、ブラジル、カンボジア、ネパールなどの国には、延べ70人の学生が短期ボランティアとして派遣された。「大学が持つ体育の知見を求めている国はたくさんあります。世界で活躍できる人材を輩出することが、今の私の目標です」と黒木さん。可能性に満ちた学生たちの目は、広い世界へと向いている。